

■大会企画シンポジウム「南相馬をともに歩む」

田野畑村の今ここで

黒岩 誠

(明星大学総合健康センター・人文学部)

後で番場さんと上原さんからは、南相馬市で何が起きている、そこに住んでいる人々が何をしようとしているのかについて、お話があると思います。私からは、東京都から岩手県に向向いて行っている支援活動をご紹介します。

田野畑村は久慈から宮古に続く北リアス線沿いにある村で、現在でも東京を朝7時に出発して午後2時に到着するくらいの、物理的・時間的な距離があります。2011年3月11日の東日本大震災では、この地域は30メートルという高さの津波に見舞われました。

私を含むチームが実施している活動は「バラ作戦」と命名されています。この事業は田野畑村から40万円と、本学会を含めて外部から100万円の金銭的補助を受けています。

本日ご紹介する活動内容は主に3つ、1)被災者の心のケアの実施、2)仮設住宅生活支援相談員などのスキルアップ講座、および3)こことからだに関する講演会です。

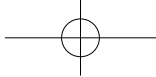
1) 被災者の心のケアの実施

私たちが当初はまず被災地支援として何をしようのか分からず、考えていました。バラの花を集めて、被災世帯350か所に週1回配ることにしました。これは花を配ることそのものが目的ではなく、被災された住民の方々とお話をするきっかけをつくるのがねらいでした。今年には前橋市から30鉢のバラをいただいています。次に、早稲田大学が所有する学生寮とその敷地となる300坪の土地をお借りして、「ムーミ

ン谷のティーパーティー」を開催しました。(ムーミン谷はフィンランドですが)英国風のティーパーティーを意図して行いました。その目的は、津波によって分断されたコミュニティの状況を改善することにあります。同じ地域の中でも、低いところは津波の被害ですべてのものが流され、住民は仮設住宅への入居を余儀なくされた一方で、高いところは被害を受けずに従前のものがそのまま残っています。そのため、コミュニティの中で利害のアンバランスが生じました。ティーパーティーを開いてみると、参加者の方は自分たちと立場が遠く離れた人に話をするという傾向がみられました。学生時代から関わっている私などは、本心を打ち明けるには近すぎる存在のようでした。

2) 仮設住宅生活支援相談員などのスキルアップ講座

岩手県沿岸地域の社会福祉協議会では、仮設住宅で生活する被災者世帯を訪問し、相談支援業務に従事する「仮設住宅生活支援相談員」を設置しています。被災したけれども家は残ったという方が生活支援相談員をやっている場合もあれば、仮設住宅の入居者が生活支援相談員になって入居者同士で支え合っているところもあります。私たちとしては生活支援相談員への支援のあり方を検討するのに、まず彼らの話を聞きました。被災したことで何が起こったのか。個人の歴史が2011年3月11日の前後で断絶し、自分のアイデンティティがなくなったの



です。物理的な生活環境が残っていても、元の生活・元の自分には戻れないのです。被災地に残って生活している住民の方にバラをお渡ししたとき、「ここ（家）に人が来たのは、あれ（東日本大震災）以来初めてです」と言われたことがありました。家が残っているから、被災者とはみなされないのです。家がない人、誰かを亡くした人が被災者なのだと。私たちとしては、そうした被災者のそばにいて生活が続いている人々への支援というものも考える必要があり、これからの課題であると思っています。

3) こころとからだに関する講演会の詳細は割愛しますが、講演会の最後に落語をやることで、人々に笑いを提供することができました。

最後に、これからどうするかという展望の部分をお話しします。私たちは被災地への支援として岩手県に入りましたが、もともとこの地域には精神科医もカウンセラーもいませんでした。ですから、一からメンタルヘルスの機能を構築する必要があります。自助・共助といった言葉が強調されているところではありますが、下手をすると分断されたコミュニティがそれぞれで凝り固まってしまうおそれがあります。それをどう解きほぐしていくか。外部から来た支援者の視点と、生活者である住民の視点とでは、全く異なる文化がそこにあることに細やかな配慮が求められます。